

不妊治療における流産回数と胎児染色体異常の関連性

医療法人三慧会 IVF なんばクリニック      松本 由香、赤松 芳恵、佐藤 学、  
橋本 周、前沢 忠志、姫野 隆雄、  
大西 洋子、井上 朋子、伊藤 啓二郎、  
中岡 義晴、森本 義晴

【目的】妊娠初期の流産において胎児染色体異常は高頻度に認められる。高度生殖医療では自然妊娠に比べて流産率が高いとされているが、反復流産症例においては胎児染色体異常が減少するとの報告がある。本研究では、既往流産回数及び流産児子宮内発育と染色体異常率の関連を調べた。【対象と方法】2004年1月から2010年12月までに当院不妊治療にて流産と診断され子宮内容物除去術を施行し、絨毛染色体検査を行った340症例を対象とした。初回流産と2回以上の流産、胎児心拍確認後の流産と胎囊のみ確認後の流産で染色体異常率を比較した。【結果】平均年齢は、初回流産：35.9±4.1歳、2回以上の流産：36.6±4.1歳で差はなかった。染色体異常率は初回流産で77.9%(173/222)、2回以上の流産では77.1%(91/118)となり有意差は認められなかった。2回以上の流産のうち、2回目では76.9%(60/78)、3回目では81.8%(18/22)、4回目以降では72.2%(13/18)に染色体異常が認められた。また、胎児心拍が確認できたのは、初回流産では48.2%(107/222)、2回以上の流産では52.5%(62/118)だった。初回流産においては、胎児心拍確認後の流産で81.3%(87/107)、胎囊のみ確認後の流産では74.8%(86/115)に染色体異常が認められた。2回以上の流産では、胎児心拍確認後の流産で83.9%(52/62)、胎囊のみ確認後の流産で69.6%(39/56)で、胎児心拍確認後の流産で染色体異常率が高い傾向が見られた。【結論】胎児染色体異常率は既往流産回数に関わらず高く、反復流産症例においても胎児染色体異常は流産の主因の一つであると考えられた。また、胎囊のみ確認後の流産の場合は染色体異常以外の要因も流産に関係していると考えられた。